

フランス民話の世界



フランス民話の世界は、日本人にはとても親しみやすい。「赤ずきん」「シンデレラ（サンドリヨン）」「青ひげ」「眠れる森の美女」など、誰でもすぐに三つや四つは思い出せる。もしかすると日本の話よりもよく知られているかもしれない。

これは、いうまでもなくシャルル・ペローのおかげである。ペローはルイ十四世の宮廷に仕え、当時の宮廷の女たちや自分の子供たちに語りかけながら、後の世の読者にも貴重な記録を残してくれた。

ペロー以前のフランス民話の記録には、大きくいって二つの流れが考えられる。一つは『狐物語』やマリー・ド・フランスの『レ』やファブリオーに見られるような中世期の文学の伝統である。そこには口伝えに基づく話が数多く収められており、当時の人々の生活や思想を生きいきと伝えているが、読者はおおむね読み書きのできる知識層に限られていたようだ。

これにたいして、もう一つの流れはルネサンス期に登場するいわゆる民衆本の伝統である。市場などで売られていたこの種の本には、暦や生活の手引きにまじって口伝えの話が多くみられる。なかでもフランソワ・ラブレーが『パンタグリユエル』や『ガルガンチュア』のヒントを得た『大巨人ガルガンチュアの名状しがたい大年代記』はよく知られている。これらの民衆本は、近世に入ると行商たちの手によって、フランス各地に伝えられ、地方の町や村の識者を喜ばせただけではなく、朗読や語り聞かせによって周囲の文字の読めない人々のあいだにも楽しみを広げることとなった。

ペローはしかし、必ずしもこうしたフランス中世やルネサンスの文学的伝統には頼らなかつたらしい。彼は、自らが直接耳にした語や、当時のサロンの教養に従って、イタリアのストラパローラの『楽しい夜』やバジューレの『ペンタメローネ』を下敷きにしてその『昔話集』をつくりあげた。そこには、当代一流の文人であった彼にふさわしい修辞や洒落た工夫がみられるが、その最もすぐれた特色の一つは、読者としての子供の存在を認め、民話を「私たちの先祖が子供たちのためにつくった物語」と明確に規定したことにあるように思われる。

民話は、もちろん子供たちだけのものではないから、この規定は必ずしも妥当なものではない。しかし、よく知られるように、フランスの中世文学には知識層にも民衆にも子供は存在しなかつた。読者はすべからく大人であった。ところがペローとその同時代人たち



は、これまでの読者である宮廷やサロンの女たちに向けられた教訓や大人向けの文体とは別に、子供たちに向かって語りかけはじめたのである。

そして十七世紀末以降の文字者たちは、たとえばボーモン夫人の場合のように、ためらわず子供たちに語りかけはじめた。そして民話はそのよい素材となった。アリエスが鋭く見抜いたとおり、台頭するブルジョアジーたちは物語の読者としての子供を発見し、子供向けの読み物を生み出したのである。

しかし、せつかく「発見された」子供たちは、同時に格好の啓蒙の対象でもあったので、大人たちはたちまち物語を教育の窮屈な檻に閉じ込めてしまう。これは、とても残念なことだったが、しかたがない。ペローというすぐれた先駆者を持ちながら、フランスの民話はきちんとした口伝の語の記録や研究に発展することはなかった。しかしその一方で、田舎まわりの行商たちは「青色文庫」と呼ばれる民衆本を売りあるき、ペローを初めとするさまざまな語を津々浦々に広め、村の語りを豊かなものにしていった。

こうして、一度は見失われてしまった民話が、フランスでもう一度見出されるためには、語は一度フランスを離れて、お隣のドイツを経由する必要があった。ここでドイツというのは、もちろんグリム兄弟とその『子供と家庭のための童話集』のことである。ペローから百年あまりを隔てて1812年のクリスマスに初版の編纂されたこの民話集は、版を重ねるごとに豊かになり、「白雪姫」「ヘンゼルとグレーテル」「ブレーメンの音楽隊」など世界中に愛されている話をいくつも収めている。そして、この二人の仕事は、それ以降の民話集のお手本となったばかりか、すべての民話研究の出発点ともなったのである。

実際、グリム兄弟の仕事は、それまでのどの民話集とも違っていった。二人はおそらく、世界で初めて語り手の声に耳を傾け、その声を忠実に記録しようとしたのである。もちろん、二人(といっても、ことに弟のウィルヘルムのほう)は、語り手の語りに積極的に手を入れたが、いわゆる作家として作品の完成をめざしたわけでない。それは、語を口伝のものとの形にもどし、より豊かな語りとするための努力であったといっていよう。二人の記録した多くの語は、語り手が誰だったのかさかのぼって知ることができるし、今日でも民俗学の資料としてきわめて貴重である。これ以降兄弟の仕事を手本として、ノルウェーのアスビョルセンとモオ、ロシアのアファナーシエフ、イギリスのジェイコブズなどの立派な民話集がヨーロッパ中にいくつも出来上がった。フランスの場合にも十九世紀の後半には、エマニュエル・コスカンの『ロレーヌの民話』、リュゼルの『低ブルターニュの民話』、ブラデの『ガスコーニュの民話』などの本格的な民話集が誕生する。なかでも高ブルターニュ地方を中心としたポール・セビオの活躍はめざましく、民間伝承学会の創立や雑誌『メリュジューヌ』や『民間伝承』の刊行を通じて、フランス全土の民俗学研究者を組織した。日本の民俗学の創始者である柳田国男も《口承文芸》という言葉の生みの親として、セビオの名前を第一に記録しているほどである。



しかし、グリム兄弟がこうしてヨーロッパの民話記録の基礎をつくることができたのは、

彼らがたんに文学者として立派であったためばかりではない。二人は、研究者としてもきちんとした見識をもっていたのである。

彼らは当初、ドイツ・ロマン派の一員として、失われたゲルマン民族の魂を伝える手掛かりとして民話を記録しはじめた。しかしヘッセンの片田舎にある故郷のカッセルの町で語の聞き取りを始めた二人は、やがて民話がドイツという枠組みを越えてインド・ヨーロッパという広大な広がりをもつ世界に共通していることに気づいてしまう。そしてこのことは、民話の起源に関する論争を巻き起こし、神話学・言語学のマックス・ミュラー、サンスクリット文献学のテオドル・ベンファイ、人類学のアンドルー・ラングなどといった研究者たちのあいだで国境を越えた熾烈な議論が戦わされ、フランスからもコスカン、ゲド、ベディエなどがそれぞれの立場から論争に参加した。

彼ら十九世紀の研究者たちの考えはいずれも、民話そのものの発生や起源を問うという人類史や宇宙論にかかわるスケールの大きなものであった。けれども、二十世紀に入ると研究はこうした壮大な仮説をカッコに入れて、よりきめの細かいものになってゆく。「民話が、いつどこで生まれたか」という発生や「どのようにして伝えられたか」という伝播についてめ関心は相変わらずだが、対象が個々の話に移り、それぞれの話ごとの国際的な比較が始まるのである。

この民話の国際比較研究にとって、まず忘れられないのが、フィンランドのアンチ・アアルネとその志を継承したアメリカのステイス・トンプソンの仕事である。彼らは、民話を人類共通の遺産と認め、その比較研究を行なうためには、まず基礎となる分類がしっかりしていなければいけないと考えた。そこでアアルネは、話の構成要素であるモチーフとその配列がよく似た類語を集めて「話型」というグループを作り、さらにその話型を整理して分類カタログをつくった。これが有名な『民話の型目録』である。アアルネのこの仕事は、のちにアメリカのステイス・トンプソンによって補われ、話型にはすべて両者の頭文字をとってATのナンバーが打たれることになった。現在ATのカタログには2500の話型が用意され、さらにこれが動物民話、本格民話、笑話、形式譚の四つに分けられている。本書の分類もこの原則に従っているので、ここで簡単にこの分類について説明しておこう。

I 動物民話 (AT 1~299)

「しっぽの釣り」や「ブレーメンの音楽隊」のように動物を主人公とした話。人間が登場することもあるが、一般にその役割は大きくない。古代・中世の動物寓話の流れをひくこともあるが、数は比較的少ない。野ウサギやカメのようないたずら者（トリックスター）を主人公とする話は、ブラック・アフリカやアメリカ・インディアンなどの未開社会の語りに多く、天地創造や作物の起源などの神話と境を接していることもしばしばである。

II 本格民話 (AT 300~1199)

人間を主人公とした複雑な構成をもつ民話で、これはさらに①魔法民話、②宗教民話、



③ノヴェラ、 ④愚かな鬼、の話の四つに分けられる。

① 魔法民話 (AT 300~749) 本格民話のなかでも、最も民話らしい不思議にみちているのは「魔法民話」である。そこには、魔女や巨人や小人の住む他界で繰り広げられる主人公の冒険が語られている。主人公は、しばしば異類婚姻や異常誕生によって生まれたパワフルな存在であるが、みずからの未熟さや敵の罠によって再三



ピンチに陥る。しかし最後には、超自然的な援助者や魔法の品物のおかげで勝利し、王女や宝物を手に入れる。ヨーロッパで「メルヘン」「妖精物語」と呼ばれる話は、もっとも狭い意味ではこの魔法民話をさすといってもよい。

② 宗教民話 (AT 750~849) 魔法民話の魔法の要素がうすれ、宗教的な奇跡や教訓がそれにかわる働きをする型の話。イエスやペテロのような神や聖人が、遍歴をかさねながら奇跡を行ない、教えを説き、「悪魔に売られた子」の場合のように敵としての悪魔や死神から魂を教い出すパターンが多い。

③ ノヴェラ (AT 850~999) 魔法民話の「魔法」や宗教民話の「奇跡」の要素がうすれ、魔女や巨人や悪魔との闘いが人間関係の葛藤や試練にかかわると「ノヴェラ」となる。主人公は「なぞときの王さま」や「領主と司祭」の場合のように、人間的な知恵や努力によって困難な状況を切り抜け、幸せを勝ちとる。

(有) 愚かな鬼の話 (AT 1000~1199) 悪魔や人食い鬼のような超自然的な敵対者が登場するが、彼らはすでに他界の住人としての迫力を失っている。「女は悪魔より賢い」や「ラミナとお婆さん」の場合のように、ちょっぴり人間を脅かしはしても、最後は人間にだまされ、からかわれて、退治されてしまう。

笑話 (AT 1200~1999) 構成が単純で覚えやすく、世界中で愛されている笑話は、話型も多く、ほぼ無数に近い。笑話の代表的主人公である愚か者ばかりが住む「愚か村」も世界各地に見られる。笑話の世界では、世俗の権力や道徳や知識はあまり役にたたない。そこは、むしろこの世の秩序が逆転する見事な反世界だといえるだろう。日頃いばっている王や役人が笑いのめされ、しかつめらしい司祭や僧侶も実は好色で欲ばりで、きわどい艶笑譚の種になる。嘘つきや泥棒が大活躍するのもおなじみで、[泥棒の名人]などはそれほど罪はないが、「ルネと領主」の場合などは、むしろ残酷と思われるほど悪が勝利する。こうした不道徳というより無道徳ともいべき主人公は、動物民話の野ウサギやクモのトリックスターと同じパワーを秘め、知恵をそなえている。



IV 形式譚 (AT 2000~2399) もっとも短いタイプの話。言葉の遊戯性が強く、その形式やリズムの面白さによって聞き手をひきつけ、ときには語りの場の雰囲気をつくり出す大切な役割を果たす。「こぶた」のような

累積譚、「赤いオンドリの話」のようなひっかけ話、「川をわたる羊たち」のような果てなし話などいくつかのパターンがおおる。話をしつこぬせがむ聞き手を煙にまき、語りの場を閉じる機能も大切である。

こうした話の分類や話型の設定は、いうまでもなくインド・ヨーロッパ世界の民話中心のものであり、アジアやアフリカなどの豊かな語りの世界をすべて包み込むことはできない。しかし日本の関敬吾や韓国の崔仁鶴の試みがしめすように、これによって民話の国際比較の作業が大きく前進したことは確かである。

フランスの場合には、ポール・ドラリュの努力によって1957年にカタログの第一巻が刊行され、その後も弟子のマリー＝ルイズ・トゥネーズによって作業は継続された。このカタログは、ATの分類にしたがって話を整理し、例話を一語あげると同時に、綿密なモチーフ分析を行ない、フランス各地で知りうるかぎりの類語のモチーフ構成を提示した画期的なものであるが、後継者であるトゥネーズのあまりに慎重な性格と研究者的な資質のために刊行が停滞し、フランス民話の全体を見通すという実用的な目的が十分に果たされずにいるのは、残念なことである。

フランスにおける民話の記録は、十九世紀の後半にセビオやコスカンを初めとする民俗学研究者の手によって黄金時代を迎えたのち、長い停滞の時期を迎える。二十世紀の前半には、理論的には日本にも早くから知られた。ユエやサンティエーヴの見事な仕事があるのだが、民話集としては見るべきものがあまりない。ポール・ドラリュはこの停滞に終止符を打ち、カタログ作りの作業と並行してジュヌヴィエーヴ・マシニョン、シャルル・ジョアスタン、アリアヌ・ド・フェリスといった若手の研究者を組織し、《フランス諸地方の魔法民話》という叢書を監修した。これらの若手研究者たちは、1940年代から、語りがすでに死に絶えたとおもわれていたフランス各地で積極的に語り手の言葉に耳を傾け、ブルターニュ、ポフトゥー、アルプス、ピレネーなど語りを志実に記録するとともに、語り手たちの生活や語りの場についても貴重な研究を残した。彼らの仕事はフィールドワーカーとして民俗誌の記録に徹し、よけいな文学的修辭を排した点で、しばしば十九世紀の記録をしのいでいる。

ドラリュの死後、民話資料は国立の民芸伝承博物館（ATP）に集められ、見事に整理された。しかし、かんじんの民話記録の作業はもう一度停滞する。これは、第一線で活躍していたマシニョンの死などの不幸もあるが、再びまた「フランス民話の死」が宣告されたことにもよる。しかもそれがドラリュ自身のいわば最後の言葉であったのだから、その影響は深刻であったにちがいない。彼は、死後まもなく公刊された『フランス民話カタログ』の序文をこんなふうに残している。

「簡単にいうと、伝承による口伝の民話は、いまや過ぎ去った文明に対応するものであり、もうすぐ完全に姿を消す運命にある。(…)だから、このカタログで私たちが分類整理を試みたのは、長い変遷の末たどりついた伝承の聖なる遺骨なのである。」

なんという悲しい言葉だろう。たしかに彼のいうように、長いあいだ口伝の話を支えてきた伝統的な語りの場は失われてしまった。かつて女たちが集まって冬の夜長を過ごした糸紡ぎの宿や、潮待ちする手もちぶさたに長い語りを繰り返した漁師たちや、麻の皮を

むいたり箭を作ったりする職人たちの手仕事も、つぎつぎと姿を消した。語りの言葉も語彙もすっかりかわって、ブルターニュやピレネーでさえ方言を語る人たちは稀れである。民話は「ほぼ完全に社会的かつ美的な機能をなくしてしまった」のだ。

こうした語りの場の喪失には、人々の自然観の変化や、農業や工業の技術の進歩も大きな役割を果たしている。かつては圧倒的であった自然にたいする恐れや神秘といった想像力の根が失われ、森や湖も楽しい散歩道となって、妖精や小人の住む他界としての役割を終えたのである。農業は機械化されて、老人の知恵や伝承は力を失った。目をみはるほど不思議なものであった職人たちの技も、ロボットやコンピュータの奇跡の前ではきわめて素朴で人間的なものに思えはじめたのだ。

しかし、こうした近代化と、それに伴うパラダイムの転換と、伝承の危機は、常に叫ばれつづけてきたのに、不思議なことに語りはいつも生きのびてきた。そしてさらに、考えようによっては、フランス人が今日ほど地方の文化と伝承に目をむけた時代はこれまでになかったといってよい。今日の「フランスの民俗学」は、一方ではル・ゴッフやル・ロワ・ラデュリなどアナル学派の歴史家たちと交流し、他方ではレヴィ＝ストロースにはじまる構造人類学やブルデューらの社会学の方法を取り入れながら、「フランスの民族学」への脱皮を志しているように見える。彼らは自分たちの文化の多様性と重層性について、これまでになく真剣に考えはじめているのだ。

こうした流れのなかで民芸伝承博物館のジャン・キューズニエの監修で1978年から刊行されはじめた《民話と民衆物語》の叢書は、現在28巻を刊行したところで休刊中ではあるが、過去の資料の掘り起こしとともに、積極的に新しいフィールド・ワークの成果を取り入れた、きわめて興味深いものとなっている。これらは、まだ過去の伝承の「聖なる遺骨」と呼ぶには早い気がする。都市化や言葉の変遷にもかかわらず、民話はまだ語り継がれているのである。日本の場合と同じく、「民話の語りは不滅です」式の楽観はもちろん入り込む余地はないが、果たして語りが早晚消え去る運命にあるのか、あるいは現在、都市民俗学が目指しているような新しいフィールドを巻き込んでしぶとく生き残ってゆくのか、しばらくは予断を許さない状況にあると思う。

(これは、1989年に白水社から刊行した『フランス民話の世界』の後書きに加筆したものです。)